

れば和尚は我を忘れて丸よ勝て丸よ勝てと叫んで居る。村人恠みながら其故を問へば委細は後で話すから先づ丸に加勢して呉れと頼む。斯くて村人に力を得た和尚は諸共に丸よ勝てと連呼したのである。が鼠の力弱からずと云ふて猫の力も鼠に劣らず。兩方共に死物狂ひに狂ふた上にて夜の明る頃に至り猫も鼠も共々死没して終ふた丸を失ひたる悲みと自分の助かりし喜びとに悲喜交々到れる。和尚は涙ながらに其故由を村人に語る。村人は猫が恩に酬ゆるの厚さに感じ且は之迄化猫杯と罵りたることを詫び兎も角も此事を名主に通ずれば名主は岩沼が仙臺領なるの故に代官田宮某に届けに及ぶ。田宮代官は稀有の事と猫と鼠の戦死を檢める。後ち一巖寺にては鼠の足と猫の足と二本宛を取り之を机の脚となし後世に傳へることにしたと云ふのである。己れの一身を犠牲として永年寵愛を受たる飼主の危急を救ふ

第三節 西林院の猫

遠江國榛原郡御前崎と云ふ處に西林院と云ふ一寺があり、此寺に猫の墓と鼠の墓と二個の石碑がある。今此墓の由來を聞けば誠に床しい話があるのである。或年の事一匹の小猫が板切に攫まつて海上に漂ふて居た之を見たる住職は船頭を呼んで船を出し直に之を救ひ上げて我子の如くに大切に飼つたのであるが、畜生ながらも住職の言ふことを能く聞別る住職も亦二なきものとして可愛がつて居た處で春を迎へ冬を送り十年も経たと思ふ其年に寺の下男が面白い夢を見た。其夢と

云ふのは、隣家の猫が来て寺の猫に伊勢参りをせぬかと勧めるのであつたが、其時寺の猫が言ふには伊勢参宮はしたいが山々なれど、何分和尚の身に災難が来て居るから、夫を片附る迄は参詣が出来ない、斯ふ言ふて参宮のことを断はり、尙も此二匹の猫が額を集めて何か私語して別れたのである。寺男は目醒めて後ち馬鹿な夢を見たものぢや、隣りの猫の飄輕者奴猫の癖に伊勢参りとは笑ひ草よと、一人て笑ひ草として終ひ、別に氣にも留めずに居たが、其夜本堂の天井に百雷の一時に落ちたやうな音がした、何事ならんと思ふたれども、夜中のことなれば住職も寺男も其儘に又眠ひつて終ひ、夜が明てから其本堂を見に行つたが、こは何事ぞ天井裏は血に染りて身の毛もよだつばかり、そこで天井に上つて見れば、住職寵愛の猫は數十ヶ所の重傷を負ふて虫の息、最早住職が掛ける聲にも受答へすることが出来ない、傍を見れば隣りの猫は

死んで居る、扱ては猫同志の喧嘩かと思ふたれど、平生仲の良い猫のことなれば、其出来事が腑に落着かず、又邊りを見ると驚く可し二尺にも餘る大きな鼠が衣を着た儘死んで居る、そこで住職は此大きな化鼠を殺す爲めに二匹の猫がかゝり、寺のは虫の息、隣りのは即死したと云ふことは判つたが、此鼠が衣を着て居るのが一向合點行かない、併し此詮索は後の事として、先づ猫を介抱せねばならぬと、百方手を盡したけれども終に安心をしたと云ふやうな面持にて息を引いた、住職は泣々此事を寺男等と話しをすると寺男の言ふには實は晝寢の夢に斯様な譚之を聞いた住職は自分の猫と隣りの猫とに厚く禮を言ひ、感謝の涙に暮れたのである、猫のことは寺男の話で判つたが、判らぬのは衣を着た鼠の事、彼よ是よと話しをして居る中に、思ひ出したのは二三日前から滞留して居た旅僧が昨夜から居ないのに氣が着いた、そうして着

衣萬端搜つて見ると鼠色の衣を着て居たと云ふことが判つた、それ
 は彼の大鼠が旅僧に化けて来て、住職を喰殺す積りの處を猫の爲めに
 看破せられ命を奪られたのか、左るにても其爲に自分の命が助かつた
 のであるから、二匹の猫は命の恩人、手厚く葬らねばなるまい、又此鼠に
 しても自分の命を狙ひし敵ではあるけれども鼠の身を以てして三寶
 の一たる僧に化けるとは何かの因縁であらうと之も住職の厚意によ
 りて猫と鼠と相對し寺内に葬むることにした、此事が四方に傳はると、
 西林院の忠義猫、西林院の忠義猫と誰一人呼ばぬ者はなく、遠近より參
 詣者が引も切らなかつたとの事である、身を殺して仁を爲したる此猫
 の如きは誠に人の模範とするに十分である。

著者言ふ此話の中鼠が化たりと云ふこと、丈は前の話に似て居る、
 併し其場所も違ひ且其順序も異なつて居るから、第二説として掲

げ置くのである (閑窓瑣談抄譯)

第四節 墓地を吊ひし猫

艶装美飾三千の遊君源平藤橘數萬の嫖客明月も不夜城に光を失ひ、六
 十餘州の榮華を集めたる江戸は新吉原にて、薄雲と云ふは嬌名隠れな
 き娼婦であつたが、其薄雲は猫が好きで常に駒と稱する三毛猫を座邊
 に離さず彼の俳匠其角が京町の猫通ひけり揚屋町と口吟だ如くに薄
 雲は道を歩むにも禿に猫を懐かせて歩いたこと、思はれる、扱て此薄
 雲と云ふのは今も言ふ通りに非常な美人であつたので、例令一夜の契
 りにも薄雲ならてはと戀と意地との兩道にて通ひ詰るもの一夜幾十
 人男の方では輕羅となりて細腰に着かんことを冀へども、薄雲は厭な
 男の親切とやらにて憎しと思ふとも嬉しさふな顔もせず、併し薄雲と

て固情の動物意氣には脆き女の心のなからずや、茲に飄輕にして智慧の廻りの早き男あり將を射るには先づ馬を斃せと、妙な處に六陷三略を用ひて、薄雲が猫を愛するより、薄雲には物も言はて、猫の駒には聲をかける頭や咽を撫てやる、駒は左も愉快げにゴロ／＼言ひ出す、薄雲の嬉れしさは一方ではない、侯相の席に榮華に飽かんよりは、猫を愛して呉れる野夫の席を喜ぶのであるから、其奥義を解した男は、一人で悦に入つて居た、此事バツと知れ渡り、薄雲に千金の笑を含まさせるには、先づ猫を愛するに加くはなしと、吾も／＼皆駒を可愛がつたのであるが、時には猫に着物の襟や顔杯を嘗めさせ、薄雲の歡心を買はんとして、却て薄雲が猫の口を洗ひ清め、爲に上つても居らぬ氣量を更に下げたと云ふ滑稽もあつたとやら、斯様な風であつたから、如何に薄雲が猫を愛し人を人とも思はなかつたかを想像することが出来る、然るに薄雲ふ

としたことより病ひに臥する身となり、鷓鴣の名薬も救ふことが出来ず、哀れ最愛の猫を残して返らぬ旅路に上つたが、感心なるは其猫、薄雲を葬むりたる墓地に行つて、七七四十九日の間、墓石に蹲まり、哀悼に堪へざるものゝ如く、食も取らねば水も飲まず、齋戒こそせね、斷食の行を勤めて、薄雲の生前に受けたる寵愛に酬むたと云ふ、後ち吉原の者共は、流石に猫の美はしき振舞に感じて、死没の後は薄雲の墓の側に葬つたのである、墓石は苔に埋まるとも、駒よ汝が聲はしき名は千古に朽ちずと知れよ。

第五節 主人の貧乏を救ひし猫

今は東京兩國の回向院に米澤町三丁目魚屋金八施主と刻した猫塚がある、此猫塚の下に眠れる猫こそは、主人金八の貧乏を救ひし殊勝なも

第五節 主人の貧乏を救ひし猫

の其傳ふる處の話を聞けば此金八と云ふは獨身者の貧乏魚屋であつたが女房や子を持たぬ代りに一匹の斑猫を養ひ之を女房とも子とも可愛がつて居た處が或年の事金八は斯る商買を爲す者の倣ひに漏れず賭事をして來春正月の仕入金を悉く負けて終ひ今更の如くに夢は覺めたれど最早跡の祭り正月の初商は如何しやう病氣と觸出すも正月早々縁喜ではなしと云ふて仕入が出來ねば得意廻りは出來ず如何はせんかと思案に暮れても置いた覺えの無き資金は棚の上から轉がり落つる譯もなし地や縁の下からは尙更湧いては來ず獨り沈むて居たのであるが此有様を見た斑猫は金八の膝の上に入りゴロゴロ言ふて居る金八はお前が女房ならば仕方もあるが畜生では話にならずオ一猫に小判其小判が二三枚欲しいわい小判の三枚もありや初商ひが出來るのぢやもう賭博は打つまい斑や何とかなるまいかと獨語

これぞ膝とも談合と云ふものであらう金八は愚痴を言ひく自暴酒が廻はつたと見えて其儘居眠をする程無く起きて見れば枕元に目も覺むる計りの小判が三枚置いてある驚いた金八は自分の目が覺めて居ることを疑ひ今の話を夢に見たと計り思ふて居る併し酔醒の水の甘さ加減では眞逆夢でも無いと思ひ直し事に據ると斑が持つて來て呉れたのかも知れぬ何は兎にあれ叩いて見やうと石を當つれば眞實小判に疑ひない金八は斑に向ひ宛ながら人に物言ふやう小判は何れから持つて來たぞ俺の貧乏を救ふて呉れたは有難いが人様の物を盗むだとあれば面目が無い斑よ斑よと撫てつ質しつすれども猫は唯だニヤと啼きゴロゴロ言ふ計り金八は儘よと量見を定め夜の明くるを待つて尙も小判であらうか但しは迷ひて木葉が小判に見えるのかと半信半疑しながら兩換店に行き之を小錢に換へて貰ふて胸撫て卸

ろし、市場いちばに行いて勇いましくも三兩さんりやうの仕入しれ、今日けふの三兩さんりやうと事違ことちがひ昔むかしのことなれば山やまのやうにもあつたであらう、金八きんぱちは之これを擔かいて初荷はつにを日本にほん橋堀留町はしほりまの犬井某いぬいみづと云ふ大家たいやの前に卸おろす處ところが犬井家いぬいみづけにては例れいにな
いゴクいが起おつて居ゐるらしい番頭ばんとうは回向院かいきやういんにても持つて行いかうと
云ふ、主人しゆじんは左様さやうなことにても取計とりかへと命いのちずる番頭ばんとうは平ひらに詫わを入いれる、
主人しゆじんは夫それには及およばぬと仰おほせられる、之これを聞きいた金八きんぱちは扱あつて此御大家このごたいやに
何事なにごとの起おりしか正月しょうがつ早々さうさう此模様このもようでは何れお家の一大事いちだいじが出来できたに相あ
違ちがあるまいと、先づ新年しんねんの御慶ごけいを申上まをして其故由そのゆゑを尋たづねた處ところが番頭ばんとうの言い
ふには大晦日おほみそかの晩ばんに此硯箱このすずびきの抽斗ひきに入いれて置おいた小判こばんが三枚さんまい無なくな
り、其疑あやひが小僧こぞうの長松ちやうまつにかゝり、兎うに角明かくあけての事ことと其儘そのままにして置おい
たが、今日けふの明方あけがたに大おほきな猫ねこが私わたくしの寢所ねどに入いつて來きて、金戸かねと柵さの抽斗ひきを
噛かつて居ゐる、そこで其猫そのねこを店みせの者共ものどもが殺ころして終しまひ、見みれば斑まだらの大おほきな猫ねこ

其處そのところへ旦那様だんなさまが見みえて何故なぜ猫ねこを殺ころす正月しょうがつ早々さうさう不吉ふきつぢやと御尤ごもつとなお小
言こなれど、殺ころして終しまうたものは仕方しかたなし、回向院かいきやういんにても頼たのまうと言いふて
居ゐる處ところぢや、金八きんぱちや三枚さんまいの小判こばんを取とつたのも此猫このねこに違ちがひない、猫ねこは化ばけ
ると聞きいて居ゐるが怖おそいものではないかと、此話このわなしを聞きいた金八きんぱちは非常ひじやうに
驚おどろいて、其猫そのねこの死骸しかいを見みれば、まがう方かたなき自分じぶんの飼猫かひねこ、扱あつて彼の金かねも犬
井様いぬいさまの金かねであつたか、何なんとて今日けふも復また取りに來きたのぢや、ア、俺おれが悪わる
かつた許ゆるして呉くれれよと、猫ねこの死骸しかいに取とつて詫わを言いふやら、嘆なげくやら、主しゆ
人は此様このさまを見みて金八きんぱちを呼よび何事なにごとぞ、此猫このねこはお前まへの猫ねこか、左ひだりるにても耳みみに
立たつは、お前まへの一言いひことどうした事ことかと聞き質たせば、金八きんぱち落おつる涙なみだを拭ぬぐひながら、
旦那様だんなさまお許ゆるし被下くはまし、實じつは舊大晦日ふるおほみそかに徒事いたづらをやりまして、正月しょうがつの資金しゆじん
を悉ことごとく奪とられ、家いへに歸かへりて思案しあんの最中さいちゆう話相手わしあいでの此斑このまだらに小判こばんの二三枚さんまいも
欲ほしいものだと言いつ、自分じぶんは自暴酒やけさけに眠ねつて終しまつた、起おき見みれば

枕元に小判三枚變な事もあるものと思ひましたが、眞實の小判に相違なかつたので、夫を資本に仕入れた魚は、御覽の通りに此盤臺に一杯になつて居ります。今日は初商ひのことなれば口開は旦那様にして貰うと来て見れば、今の仕儀誠に申譯がないと泣きの涙に詫入つたが、犬井と云ふ人も流石に大家の主人之を聞いて金八や左様なこととは知らず、店の者が之を殺したのは不憫至極三兩の金は斑に遣る外に五兩丈お前に遣るから、それで猫の葬式をしてやれよ、徒らにも賭事はするなと懇ろに諭されたので金八は嬉れしい涙と悲しい涙とを一所に流しながら猫の死骸を貰ひ受け厚く回向院に葬むりて猫塚を立て、香華を四時絶やすことがなかつた。以來賭事は癢める女房を貰ふ次第に繁昌して維新前迄兩國米澤町の魚屋金八とて名高い魚屋となつて居たが、後には商賈換をしたとやら、斑よ眠れ汝の罪は既に償はれて居る。

第六節 命を捨てゝも令嬢を守りし猫

之は筑前國にて聞いた話昔或る大家に一匹の猫を飼ひ、其名を玉と呼びて寵愛して居たが、其家に一粒種の娘があり、年も十六十七となるに連れ、美はしいこと話に聞く小町も斯くやと疑ふばかり家は金祿豊かな素封家娘は一粒種の小町娘近所近在に評判も良ければ兩親の嬉れしさは一方ではない猫も亦其娘の友達として能く馴着いて居るものから、兩親の嬉れしさと娘の寵愛とを一身に鍾めて、日夕玉よ玉よと膝から下へは降さぬもてなし、處が何時の頃よりか娘が一寸厠に下ると必ず玉が従いて行つて、チャンと蹲まつて居る、目覺めて居る時は言ふに及ばず、しどけなく眠つて居る時にも娘が厠へ下る時には必ず跳起つて、自分も厠に行つて娘の用便が済むのを待つて居た娘の方では此事

を何とも思はずに居たれど、親達の方では不思議に堪へない昔話にも猫は化けるとやら、若しや娘に魅入りて居るのではないか、斯様なことがあつては大變な事と、夫より繩にて縛りて置いたが、矢張娘が厠に下る時には玉は其繩を喰ひ切つて例の如くに厠に行くので、兩親の方では最早夫に違ひなし、此太繩を切ても娘を狙ふ上からは愈々娘に魅入りて居るに違ひない、猫は魔性の者と聞くが、困まつたことになつたものだ、恩を仇にて返す悪性者奴と、一家は忽ち憂ひの雲に鎖された、或時又例の通りに娘が厠に下りやうとしたが、玉も亦従いて行くので、恩知らず思ひ知れとばかりに、一刀の下に玉を切り殺した處が、其頭が矢張厠に飛んで行つた、兩親は氣が氣でなかつた、然るに其猫の頭は厠に入つて鴨居の上に大きな蛇の首に喰ひ附いたので、初めて大きな蛇が娘に魅入りて居たことが判ると共に、娘が厠に下る度毎に玉が従いて行つ

たのは、其蛇を退治しやうとの心掛、且は娘の身に災難の來ぬやうにとの深い志からであつたことが判り、娘の無難が嬉れしい、夫丈猫を殺したことが悲しくなり、其亡骸を抱き上げては禮を言ふやら詫びるやら丸て子でも失つた時のやうであつたが、斯くてある可きにもあらねばと、立派に葬式をしてやつて、法に従つて回向も供養も怠らなかつたとの事、何故か蛇は女に能く魅入るものと聞く、又古老の話にも三度も美はしき婦人が蛇に魅入られたのを見たとき、此娘の如きも其花の如き顔せが仇となりて、蛇に魅入られて居つたのであらうが、猫は夙も之を知つて、娘様に災難あらせじと、其厠に下る毎に自分も従いて行つたのである、殊に首を切れても其一念忘じ難く、首のみ厠に飛入りて、今最後と蛇に喰ひ付き、其蛇を噛み殺して安堵した上に死せんとしたる、其志の健げさは、實に感ずるに餘りあることとて、永久に猫の忠義鑑と

第六節 命を捨てしも令嬢を守りし猫
して傳ふべきであらう。

動物心理學の開けざる時代には、家畜の動作判明ならず、爲めに斯の如き悲慘事を演じ、而も身が危難より救はれたるを知らず、後にして後悔すること甚だ多かりき、斯る事は犬に於て最も多く、猫に於ても往々にしてあり、犬猫の如き家畜を愛育する者は、若し是等のものが、常に變りて或る動作を爲したる時は之を撲ち之を殺す前に深く四邊の事情を研究するが良からう。

第六章 猫に関する重大なる傳説

第一節 釋迦の涅槃像に猫の居らぬ

ことに就て

民は悉く邪道に迷ひ、世を擧て歸趣を誤りたる天竺に、一大偉人が王の世子として降誕せられたが、此偉人は誰あらう、佛陀釋迦牟尼如來であることは言ふ迄もない、今此偉人の生誕せられし年月を案ずるに、悲しい哉、由來天竺には歴史を欠いて居るので、逆も正確に知ることが出来ない、西藏國にて言ふ處によると、異説が十四種ある、最古の説は紀元前二十五世紀なりと云ひ、最近の説は紀元前五世紀の頃であると云ふ、而して其他のものを調べて見れば、錫蘭島人は今より二千五百三十三年

第一節 釋迦の涅槃像に猫の居らぬことに就て

前に生れたりと稱し、東洋學者カンニング氏は二千四百六十六年前と説き、マクスミュレル氏は二千四百六十五年前と言ふて居られる併しながら支那の探險家が印度に入りしは二千八百年前であるから、其當時既に釋迦氏の存命中若くは死後間も無かつたとすれば、兎に角二千八百年前とするのが至當であらう、而して釋迦如來の死没したのは八十何歳と云ふことであるから、先以て二千七百年代に死没し、所謂涅槃に入られたものとすべきである、扱て釋迦如來が涅槃に入るや國民は申すに及ばず、禽獸虫魚有りとするもの、其死骸の前に慟哭し、哀悼の念に堪へなかつた、然るに其涅槃像に猫が居ない最も我國に傳はつて居る涅槃像の畫幅は最初支那にて出來たものである、そうだが、兎に角猫が居ないのは事實である、茲に於て之を見た我國の佛教徒は思へらく、此有難き三世の教主の袂別に猫が居ないのは、餘りに惡性のも

のであるからである、然り猫は惡性な動物である、同じ家に飼はれながら、犬は如來の前に出られるのに猫は出られないとは、何事ぞと、勝手に理窟をつけて確信し、遂に世間一般が歴史的に斯様に思ふやうになつたのである、元來此涅槃像に居ないものは猫ばかりではない、其外に何萬種の禽獸虫魚が居ない、然るに是等のことは意に介せずして、獨り猫が居ないと云ふので、猫が如來の前に出られぬとするのは、随分片寄りたる見方であるが、常に犬猫と並び稱せらるゝにも拘はらず、犬が居るのに猫が居ない爲めに、斯くは信ずるに至つたのであらう、併しながら吾輩は既に一般が斯く信ずる以上は、教説上何等かの根據があるのかも知れぬと思ひ、是等のことに精通せる一老僧を訪ひ、其説を求めた處が、老僧の言はるゝには、そは以ての外のことである、如來は犬も猫も虫も蟋蟀も皆佛性を具ふと説いて居られる、大慈大悲の如來何て猫の

みを悪性不^{あくしやうふ}移^いのものとして退^{しよぞ}け給^{たま}はんや涅槃像^{ねはんざう}なるものは中世支那^{ちゆうせいしな}にて出^で來^きたもの其^{その}猫^{ねこ}の居^ゐないのは畫家^{ゑか}が猫^{ねこ}を畫^かかなかつたからである。猫^{ねこ}の居^ゐないのを以^{もつ}て猫^{ねこ}を罵^{のの}詈^{のち}するの可^か否^ひは暫^{しば}く問^とはずとして如來^{にょらい}が之^{これ}を近^{ちか}寄^よせ給^{たま}はざりしと思^{おも}ふものあらば之^{これ}れ實^{じつ}に佛^{ぶつ}教^{けう}上^{じやう}聞^{もん}捨^すてにはならぬ事^{こと}は猫^{ねこ}と云^いふ小畜類^{せうしよくるい}に關^{かん}するも佛^{ぶつ}の心^{こころ}よりすれば其^{その}德^{とく}を汚^けがすことが少^{すく}なくない。斯^かく言^いひて猫^{ねこ}と佛^{ぶつ}教^{けう}との關^{かん}係^{けい}を明^{あき}かにしたる上^{うへ}涅槃像^{ねはんざう}の處^{ところ}に猫^{ねこ}の居^ゐる畫^ゑがあることを示^{しめ}し且^{かつ}つ曰^いはるゝやう彼の芝山^{しやさん}（千葉縣^{ちやんぺんけん}）の仁王^{にわう}様^{さま}に其^{その}大^{たい}幅^{はく}がある然^{しか}るに畫^ゑ伯^{はく}が之^{これ}を畫^かいて居^ゐる時^{とき}に始^し終^{しゆう}其^{その}寺^{てい}の猫^{ねこ}が居^ゐて居^ゐつた處^{ところ}で畫^ゑ伯^{はく}は猫^{ねこ}に向^{むか}ひお前^{まへ}も仲^な間^まに入れて欲^ほしいかと問^とたるに猫^{ねこ}はニヤンと返^{へん}事^じをしたと云^いふので左^{ひだり}ばとて猫^{ねこ}を畫^かいたと言^いひ傳^{つた}はつて居^ゐる之^{これ}を見る後^{のち}の世^よの人は猫^{ねこ}も涅槃像^{ねはんざう}の下^{した}に行くことが出^で來^きるを信^{しん}ずると共に亦^{また}猫^{ねこ}にも佛^{ぶつ}性^{じやう}のあるこ

とを明^{あき}かにするであらう世^よ事^じは凡^{すべ}て斯^か様^{さま}なものよとて笑^{わら}ひを漏^もらされた猫^{ねこ}と釋^{しやく}迦^か如^{にょ}來^{らい}との關^{かん}係^{けい}は右^{みぎ}の如^{ごと}してある左^{ひだり}れば猫^{ねこ}を以^{もつ}て三世^{さんせい}の親^{おや}たる如來^{にょらい}の許^{もと}に行^いかれぬとか又^{また}行^いかなかつたとか云^いふ處^{ところ}の傳^{でん}説^{せつ}は打ち消^けして良^よからう若^し飽^あく迄^{まで}之^{これ}を信^{しん}ずるに於^おては老^{らう}僧^{そう}の言^いはる如^{ごと}くに如來^{にょらい}の大^{たい}德^{とく}を害^{がい}する次第^{たい}である如來^{にょらい}は萬^{ばん}有^{いう}皆^{みな}佛^{ぶつ}性^{じやう}を有^{いう}すと言^いはれ猫^{ねこ}は佛^{ぶつ}性^{じやう}を具^そへずとは言^いふて居^ゐられない而^{しか}も根^{こん}據^{きよ}なき一^{いつ}傳^{でん}説^{せつ}を信^{しん}じて言^いを逞^{たくま}しうするは累^{かさ}を如來^{にょらい}に及^{およ}ぼす者^{もの}と言^いはざるを得^えない何^{なに}某^{たがひ}の家^{いえ}で舅^{きゆう}姑^こと夫^ふ妻^{さい}とが別^{べつ}居^ゐして居^ゐるを見^みて直^{ちやう}に媳^{よめ}が悪^{わる}いからであると言^いふ者^{もの}あらば之^{これ}を以^{もつ}て誣^しゆるものとするであらう畫^ゑ師^しが食^{じき}器^きを畫^かいて箸^{しやく}を畫^かくのを忘^{わす}れた時^{とき}に他人^{たにん}之^{これ}を見^みて何^{なに}某^{たがひ}ては箸^{しやく}の代^かりに指^{ゆび}を用^{もち}ふと言^いふならば之^{これ}をも誣^しゆるものとせぬ者^{もの}はあるまい話^{はなし}を聞^きいて見^みれば猫^{ねこ}と釋^{しやく}迦^か牟^む尼^に如來^{にょらい}との關^{かん}係^{けい}も右^{みぎ}の如^{ごと}きものである。

第二節 死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て

第二節 死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て

死人があるとき直に其飼猫を何れにか連れ去り且つ棺の上に刀類を置くのは、佛教各派を通じての習慣である。既に此事は佛教各派の習慣である以上は我國全體に通じて行はれて居る處の一習慣と云ふべきである。

猫と死人との關係に就ては傳説が二種類ある。即ち其一は死人の側に猫が居ると其死人が動くと言ふので、其二は猫は死人を盗み取りて喰ふと云ふのである。此傳説は一般に信ぜられて居るやうであるが、吾輩が耳にしたる處のものを掲げて見れば先づ次の如きものである。昔或

處に死人があつたが最早出棺間近になつて來たので色々準備をして居る最中に其棺の中に收めてある處の死人が動き出し遂に其棺から飛出した。之から家中は大騒ぎとなり甲の者は病氣中粗末に取扱つたから死人が怒り出したのだと云ひ乙の者は今夜家に置いて欲しいのだ兎に角埋葬せらるるのが厭なので棺から飛出したのであると言ひ丙丁亦思ひくゝに憶説を吐き遂に其日の葬式は沙汰止みとなつたが翌日になつても又時々動き出すので一家親族のものゝ心配は一方でない處へ一人の六部が來たので其事を話した處が其六部の言ふには恐らく猫の所作であらう猫は死人を動かして困まるとぞこて飼猫に氣を着けて見た處が果して棺の置いてある處の座敷に猫が居たので扱こそと直に其猫を連れ去つた。それより死人の動くのは静まり野邊の送りも濟まして安堵をしたと云ふのである。而して此猫が死人

第六章 猫に關する重大なる傳説

第二節 死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て

の側に居ると死人が動くと言ふことは種々なる講談物にも出て居る、固より講談師連中の言ふことであるから、取立てて言ふ程のことでもないが、兎に角之によりても猫は死人を動かすと云ふことが廣く信ぜられて居ると云ふこと、丈は明かにするを得るであらう、次に猫が死人を盗むと云ふ話は、之も昔の事、供養讀經式の如くに濟まして、今しも埋葬地へ掛らうとする處へ、一人の老僧が通りかゝり、棺を擔へる者に向つて言ふには、お前方は氣の毒なものぢや、空の棺を擔ふて居る、死人は入つては居らぬ、猫に奪れて終うたか、可愛相ぢやと之を聞いた處の者は、左様な筈はない、現に此棺に入れて來たのぢや、人の葬式に難題を吹掛る悪僧奴と罵るけれども、僧侶は矢張、死人は入つて居らぬと言ひ張る、然る處へ一人の擔人が左様に聞いて見れば、此處七八丁前から急に輕くなつたと言ひ出したので、兎も角蓋を取つて見やうと云ふことに

なり、山に擔ひ上げて蓋を取つて見れば、僧侶が言ふ如くに、死人は居ない、唯だあるものは六文錢と小道具である、一同は驚き且は悲しみ、老僧に向つて前の無禮を謝し、死人呼戻しのことを切に頼む、其處で老僧は其乞を容れて何やら咒文を唱へた處が、何時の間にか、死人は棺の中に歸つた、棺の中を見よとの老僧の言ふが儘に、近寄りて見れば、死人は靜かに眠つて居たので、皆安堵の思ひを爲し、永別の悲しみよりも、死人呼び戻しの嬉れしさに、涙を流しつゝ、葬式を濟したと云ふのである、吾輩は此傳説を思ひ出して、寺方にも尙此傳説を信じつゝあるかを調べやうと思ひ、天台宗の一老僧を尋ねて之を聞いた處が、以上二個の如き傳説は聞いて居れども、見たことはなし、殊に其棺中の死骸が何れにか、扱去られたる話は、明治の初年、東京にもあつたと聞く、即ち上野の權現様の下通りを棺が通つた時に、其中の死人を奪はれ、而して其死人は公

第二節 死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て

園の山下通りに落ちて居たと云ふことであつた併し之が果して事實であつたかどうかは知らぬ又猫の所爲か否かは無論知らないが昔から傳ふる所によれば年經し猫はキヤシヤと云ふものになり神通力を得て死人を喰ふを好むとあるから若し棺中の死人が無くなるやうなことがあるれば其キヤシヤの所爲とても言ひ得るであらうが夫も若しあつたらばの話でマア眞面目には話されない云々そこで吾輩は話題に一步を進めて猫を棺の前から退ける理由と刀を棺の上に置く理由とを尋ねた處が老僧は其猫を連れ去るのは死人が動かないやう刀を棺の上に置くのはキヤシヤの來ないやうにとの注意に外ならぬ併し之は寺方の儀式にあるのではない葬式の個條に斯ることが定めてあるのではない唯だ傳説が一般に染込むて一規定のやうになり又事實に於て動かすべからざるやうなものになり居るのであるが別に悪い

習慣とも思へぬ處から古來仕來りの儘にして居るのである宗派を異にするに従つて葬送の儀式にも多少の相異がある然るに此猫を連れ去り又刀を棺の上に置くこととは如何なる宗派にても行ふのは注目すべきことであらう而して其キヤシヤ云々のことは一寸何とも言ひ兼ねぬが猫が死人を動かしたと云ふことはあつたことかも知れない又此事があつたにしても何も妖怪的なことではなく學問上から立派に説けることではあるまいか併し之等の點になると愚僧等の知る處ではない若い近頃の學問をした人に限る云々吾輩は此説を聞いて猫と死人との關係に就ては寺方に何の交渉もなく寺方では其爲すが儘にさせ其言ふことに逆はない丈のことなるを明かにしたので更に轉じて或る理學者を訪ふて猫の毛皮の性質を聞き質した處が猫の毛皮は頗る發電力の強いもので電氣を起す處の或種の物には猫の皮を用

第二節 死人ありたる時に猫を連れ去り且つ其棺の上に刀を置くことに就て

ふるのである、即ち世間に傳ふる處の猫が死人を動かしたと云ふことは、此發電性の鋭敏なる性質からして死人に感傳し、爲めに死人が他動的に動いたのて、何も猫が或る心を有して動かしたので、何でもない、詰り電氣作用に外ならぬ次第であるのを昔電氣のことが明かならざりし世には甚だ奇怪なことゝなし、何か猫に悪意でもあつて動かしたものと想像して、遂に今日の風を爲したものに相違ない昔の人は電信をも魔法としたものだが、併し今日では電話で話をして、誰も疑ふものはない昔の人から言へば、御互に皆魔法遣ひぢやないか、葬式に關する専門家たる僧侶と理學者との所説は右の如くである、左らば死人に對する猫の關係も決して妖怪的のものではないことが明かになつたてあらう、斯く言ふものゝ吾輩は決して死人の前に猫を置けと云ふものではない、假令電氣作用にしても、死人の動くのは良い心持のもので

はない、唯だ其道理を明かにして置きたいのである。

第七章 猫辞典

一、ねこま 之はねこの古名で昔は猫とは言はないで、ねこまと言ふて居たのである。即ち彌古萬と書き、中世彌古と稱するに至つたのである。猫の名にこまと云ふ名の多いのは、ねこまのねを取つたもので、詰りねこと云ふことである。

二、ねこま (猫目) 之は扇の親骨にほりすかしてある穴の事。

三、猫また 之は年經し猫のことである。兎に角之は非常に犂猛なる猫を意味する。否猫股は夫を通り越して、猫の尾が二本に割れて、恐ろしい顔相のものになつて居るのを指すので、彼の徒然草に言ふ所の山猫云々、の如きも矢張斯る形相の猫を指したものと思はれる。

四、ねこぶく (猫籬) 船の錨に用ふるかぎの事。

五、ねこはぎ 之は萩の一種くさはぎの事。

六、猫かむり 表面柔和正直に見せかけて、内心には業慾非道を包めるもの。其他凡て表に現はして居ること、心の中との異なつて居るものに對して言ふ處の形容詞である。外面如菩薩、内心如夜叉、之れを猫被むりの標本であらう、併し猫は果して斯の如きものであらうか、吾輩を以て見れば、之は甚だ不當の造語である。

七、ねこなでこゑ 之れも猫が何か物を欲しい時に用ふる處の啼聲を以て、人に媚びるものとし、媚び諂ふ人間が優さしいやうな聲にて物言ふのに當筈めたもので、猫の方から言へば迷惑至極である。猫が物を欲する時に飼主に向つて啼くのは、丁度小供が母親にお菓子でも要求するやうなもの決して成人したものが媚び諂ふ時に用ふる處の甘つたるい聲と同一のものではない。左れば、之亦前の猫被むりと同様猫を嫌

ふ處の人が故意に造つた一種の悪罵に過ぎぬのである。
 八ねこぜ 猫が蹲つて居る時には必ず背中が高く、之を背中の曲がつて居る人間に當て、姿の見悪いことを誹謗するに用ふるのである。猫の猫背は可愛らしいが人間の猫背は全く美はしいものではない。併し斯く言へばとて女共が反身になつて大道狭ましと歩いて居るのは、猫背で歩くよりは見悪いものであるから、多少斟酌して宜からう。
 九猫あし 膳杯の脚の上部膨れて中部以下穿くなりて、猫の脚に似たるものを言ふのである。膳に限らず机でも盤臺でも猫脚の着いて居るのは見得の良いものであるから、猫嫌ひの人でも之を用ひずには居られまい。
 十ねこぐさ せがいさうの事也。
 十一ねこづら しいらの事なり。

十二ねこさめ さゝるわりの事なり
 十三ねことり 常陸地方にては梟のことをねことりと云ふ。猫の顔に似て居るからである。尤も肥前地方ではねこさぎの事をねことりと云ふそうである。
 十四ねこさぎ 之れも多少猫の顔に似て居るので、鷲の一種に斯くは名づけたのである。近江若狭の國地方では斯様に呼んで居る。
 十五ねこかき 薬にて組みたる一種の蕙の事なり。
 十六ねこぐるま 重荷を積みて山路を運送するに用ふる車のこと也。
 十七ねこいし 但馬國養父郡養父神社の境内にある石の名であるが、之に祈願を込めれば鼠害を免れるとて、養蠶家の崇敬からず。
 十八猫天神 甲州中巨摩郡龍王村在にあり、此社より石を借りて來れば鼠害に罹らぬと言ひ傳へ、之亦養蠶家の參詣する者が少なくない。

十九ねこ 柳の花の猫の毛に似たるを以てにや俗に其花をねこと云ふ。

二十ねこ 藝者のことをねこと云ふ或書には寢子とあれど如何にや、藝者は寢子に非ず矢張藝者である。

二十一ねこ 冬期暖を探らんが爲めに用ふるものにねこと云ふものがある。

二十二ねこば 猫が糞尿を爲す時には必ず其土を堀る糞尿終れば丁寧其穴を埋めて能く其周囲を嗅ぎ少しも其香ひの無きに至るを待つて返るを見て之を悪事を爲して知らぬ顔するものと解し人が他人の物杯を盗みて知らぬ顔を爲すをねこばと云ふのである公平に見れば猫に斯る性質あるは奇麗好きなるを意味するに之れさへも悪罵の種とせられて居るばとは糞のことなり。

二十三猫の目のやう 猫の目の瞳は日出と共に細くなり日中には恰かも絲の如くに細くなる又段々と大きくなりて夜に入れば眞圓となり全く玉のやうになるものであるが昔の人は之にて其日の時を知つたとやら無論何時何十分迄は判らなかつたであらうが大抵の事は辨じ得たと信ずる而して猫の目が日中になるに連れて細くなるのは光線が強くなるから夜分に玉のやうになるのは光線なき夜中に於ても視力を必要とするからであらう其證據には日中でも樽陶敷日には比較的に瞳の大きいものである即ち晝は瞳を細くするのは夜中の視力を強からしめんが爲めの作用と思はれる猫の目が時々變はり行くこと此の如し之を人事に當符めて言語に統一なく今言ふたことを後には自分で打消すが如く凡て定まりなき人間の事を指し彼は猫の目のやうだと評するのである朝三暮四の人之れぞ猫の目のやうな人。

二十四、獵する猫は爪隠くす。能ある猫は爪隠くすと同義である言ふ心は猫は常に牙や爪を隠して居るけれども鼠を能く捕ると云ふので即ち人も黙して容易に語らざるものに大なる人物があると云ふのである。誠や直に口を出す者や剛巧さうな者に碌なものはない、聖人は愚に似たりとやら、何も知らぬやうな顔をして居る者に大人物がある否。大人物は苟くも語らない、語れば直に衆を壓し又は感ぜしむるのである。獅子や虎は容易に動かない、動けば百獸を招伏せしむるではないか。

二十五、猫の前の鼠。弱き者も自分より弱き者に對しては強者である。猫も鼠の前では威風堂々たるものである。

二十六、猫の前に鯉節。鯉節に限らず猫の好む者を猫の前に置いて猫に食はれたからとて猫を叱る者を笑ふた語猫が其前に置かれたる鯉節を食ふたからとて強ち泥棒したとは言はれまい、よし泥棒したのであ

つても好物を畜生の前に置いた不注意は免れまい、令夫人達の嗜むべき點であらう。

二十七、猫にまたいび。またいびは猫の好物、之を猫に與へる時は或は嘗め或は躰にすりつけ、一種快感に堪へざるものゝ如くである (第二章 參照)

二十八、猫に小判。豚に眞珠の同意義であらう、猫は鯉節の十本も二十本も買へ得る小判よりも鯉節の方を喜ぶもの、何も判らぬものを猫に小判と云ふ併し藝者も俗稱ねこと云ふから、之れならば小判が直に判る。

二十九、猫舌。猫は如何なる珍味好物にても熱きものは食ふ能はず人間でも熱い物を食ふ能はざる者がある、之を猫舌と云ふのである。

三十、まねさねこ。女郎屋藝者屋料理屋其他浮きたる商賣を爲し居る

家の神棚には必ずまねきねこと稱する猫の人形が置いてある、其形は必ず片手を揚げ而も其手は少しく曲つて恰も人を招くやうに出来て居る之は千客萬來の縁儀の神と云ふ積りであらう、養蠶家には片目の達磨を安置し、豊作なれば其片目に墨を塗る、名けて豊作の守護神と云ふて居ると同一信仰か、左るにても客を呼ぶのには鼠鳴きを爲し、家には猫を置くのは甚だ要を得ないまねき猫のある家ではまた、びの線香を燻すのが至當であらう。

三十一猫の暑いは土用三日 猫は非常に寒冷を忌む動物であるから、斯様な語が出来たものと思はれる、由來猫の原産地は埃及又は印度の如き熱帶地方なので、我國に猫の來たのは佛教の舶來と同時に、即ち言ひ傳ふる處によれば今より四五千年の昔猫は既に埃及にて家畜としてあり、我國には佛教の經卷及び木像の保護の爲に來たのである

そらだ、而して猫が今も尙暑に親みて寒を忌むのは、其原性が残つて居るのであらう、併し吾輩の實驗によれば九十度以上の温度には大分暑熱を感じるやうであるから、眞逆土用三日とも言へまいが、兎に角暑よりも寒い方が餘程苦しいやうである。

三十二猫は魔の者 猫は魔性のもの、て年を経れば化もする、又姿を見せなくなる、其他色々魔性なことを行ふと云ふのは、昔天竺に猫を神様として祭る種族と魔性のものとして排斥する種族とあつたが、恐くは後者の傳説から來たものであらう、殊に猫の毛皮の電氣性が判らぬよりして、愈々斯る説が下級國民の腦裡に深く染込むだものと信ぜられる。

三十三猫は地獄の釜の火を焚く 飼主が若し地獄の釜入になる時は、犬は地獄の釜へ水を入れて呉れるし、猫は其火を焚くと言ふ心は猫

は恩を仇にて返すと成り、地獄なるものは既に印度の産物天然に熱いの
に其上に熱の苦みを爲し居る時火を焚かれては堪らない而して猫
が其火焚をするに云ふのは何れ猫を排斥した種族間に出来た傳説で、
之が我國にも傳はつて来て我國民の説話となり確信となつたのであ
らう。

三十四猫のこつこ 猫の兒と云ふ意味である、東北の人は牛の兒のこ
とをべこのこつこつと云ひ馬の兒を馬のこつこつと云ふ、其他土瓶茶碗
こと云ふが如くに多くはこの字を附す猫のこつこつと云ふも詰り猫の
兒と云ふに外ならぬ。

三十五へげ猫 へげ猫とは灰毛の猫と云ふこと、別に變はつた意味
を有つて居るのではない。
三十六手飼の虎 之は非常に猛悪なる猫を指すので彼の猫股と同意

義を有つて居るのである、古今六帖にあさぢふの、小野の篠原いかなれ
ば手飼ひの虎のふしどころなると云ふのを見ても如何に恐ろしきも
のであるかを想像することが出来る、手飼ひの虎を以て直に山猫と解
して居る人もあるが、之れは山猫でなくして矢張家猫の年経て所謂の
ら猫となつたものと解する方が至當であると信ずる。

三十七猫の乳母 長保元年九月拾九日一條院内裡の猫子を産む、此時
帝は猫の乳母なる官職を設けたので、時の人々は之を嗤ふたと小右記
に書いてある、猫の乳母とは馬の命婦と共に官職の名である、清少納言
は其著枕草紙翁丸の段の處に御猫と書いて居るが、其御猫とは此時の
ことを書いたのである。

三十八のら猫 どちらねこと同意義で宿無し猫と云ふことである、夫木
集に眞葛原下這ひありくのら猫のなつき難きぞ、いもが心よ實に宿無

し猫は人に馴着き難いもので、其猫が産むだる子猫も矢張同じことである。

三十九、猫に紙袋 猫に紙袋を被むせると跡しざりをする、是を面白くして昔は遊戯の一にして居たとの事、悪戯も此に至りて極まれりと言はねばならぬ、着た笠は紙の袋か、田植女が猫背中して跡にしざるは、紙袋着ねど田植が猫背中ちよつかい早く跡しざりする、等の歌もある。四十、猫も杓子も 猫がちよこく手を出すのは其形杓子に似て居るので、此語が出来たと言ふ者あれど、手が杓子に似て居からとて此語が出来るべしとも思はれない、又禰宜も釋氏も轉化したるものと云ふものあれど、之れとても附會の説たるを免れまい、併し今日此語は誰れも彼れもと云ふ意味に使用されて居る處から見ると、後者の方が前者よりも尤も氣に聞えぬでもない、一休和尚の歌に『生れては死ぬるもの

なりおしなべて釋迦も達磨も猫も杓子も』參照すべきであらう。四十一、金華猫 金華猫は人を妖すとあるが、金華猫と云ふ猫が居るのではなく、金華とは地名である、人を妖すとは眉毛に唾の必要がある。四十二、金猫銀猫 昔居たりし淫賣婦のことなり、金色の猫と銀色の猫と云ふことではないのである。四十三、猫の黒焼 毛は言ふに及ばず、爪迄で黒い猫を黒焼にしたのを飲むと喘息病が癒ゆるとある、又腹を切り坏して腸の出で居るのに、此黒猫の黒焼にしたのを粘にて背中へ貼ると直に治するとあるが、之は保證が出来ない。四十四、猫が魚を喰へたやう 魚に限らず鼠でも喰へた時には猫は捕られまいとして、随分恐ろしい顔相をする其顔相を形容して、醜婦を諷つたものであるが、猫が魚を喰へた時のやうな顔を爲せる婦人幾人あ

りや。
 四十五猫が胡桃を廻はすやう 要領を得ぬことに用ふる也。
 四十六猫が肥ゆれば鯨節が瘦せる 實に尤も至極である、高利貸等が
 段々富力を増すに従つて借人たる貧乏入は愈々貧乏する。
 四十七猫の魚辭退 魚を辭退する猫は一匹も居ない、然るに若し之を
 辭退する猫があるならば、之は偽りの辭退である、多勢の中には欲しく
 て堪らぬ時にも一寸辭退して其癖人一倍も食べるものがある彼のい
 るは譬に言ふ處のいや／＼三杯と云ふのも、是等の人々を誹謗したの
 であるが、猫の魚辭退と云ふのと相應じて眞を穿つて居る。
 四十八猫と庄屋は取らぬが良い 取らぬが良いと云ふても鼠を捕ら
 ぬ猫が良いと云ふのでなく、魚でも鳥でも捕らぬ猫が良いと云ふので
 ある、庄屋も亦能く税金其他を取立て時々人民に難儀をかけたもので

あるから、之と猫と同一にして取らぬ方が良いと言ふたのである、今日
 の語で言へば猫と政府は取らぬが良いと云ふべきで、又實際から見ても
 是非共必要な金とは言へ随分苛酷に取つて居ることであるから、チ
 ト取つて減らして貰ひたいと思ふものは強ち其日暮しの者ばかり
 取つてはあるまいと思はれる、而して彼の織物税、通行税、鹽專賣の如きは
 第一に廢めてほしい、其代りに壯丁税、蓄妾税、市内邸園税の如きは取つ
 て貰つても差支ないとは、或る婦人の話。
 四十九猫に石佛 高貴にして靈現あらたかなりと傳ふる佛様でも、猫
 にとりては有難くも何ともない、即ち猫に小判と同意義で何を言ふて
 も感覺なきものを諷するに用ふる語である。
 五十猫の子を貰つたやう 箆筒も長持もなければ衣類調度もなき嫁
 を貰つた時に、慾深の婆様がつぶやく語である。

五十一猫の子を貰つた積り。之は媳が婿殿に對して言ふ怨み言である。チヨットした事にも歸れ杯と言ふて見給へ必ず媳君は猫の子でも貰つた積りて杯とつぶやくてあらう否之は受合である。

五十二猫の尾のやう。不用のもの無益のものを有することに用ゆ併し猫の尾は果して不用無益なりや研究して見なければ判らぬ。

五十三猫の鼠捕らず。役に立たぬ者のことを言ふ猫は鼠を捕るべきものにして又多くは鼠を捕らしめんが爲に飼育するもの然るに其本分たる鼠を捕らなければ全く無用のものであるが如くに人も何の役に立たず自分の本分を盡す能はずば鼠を捕らぬ猫に異なるなし。

五十四猫の手も借りた。忙がしい時には猫の手でも借りたとい能く言ふことである雨が降つて来た洗濯物は沾れる背中で餓鬼(小供)や泣く飯や焦げると云ふ様な場合には全く猫の手でも借りたのであ

らう。

五十五猫の鼻と女郎の心。は常に冷たい全體女郎杯から厚い情を被むらんとするのが間違ひであらう吉原が明るくなれば家が闇傾城に誠あり杯の小唄を信じないで冷たいものと信じて居るか良い猫の鼻の冷たいのは無病健全の證據である。

五十六猫の額にある物を鼠が狙ふ。虎穴に入りて虎子を取らんとするが如し自分の命を失はずば幸ひである。

五十七猫の晝寢に油断するな。猫は狸寢入をするものではないが左りとして大切なものを猫が眠つて居るからと思ふて打棄て置くのは宜しからぬ。

五十八猫の留守は鼠の代。猫が居なければ鼠の天下である鼠語ふて曰くあらざらん此世の中の思ひ出に今一度は猫なくもがなじ」と言

へば聞き耳立つる猫殿の眼のうちの光り恐ろし。
五十九猫の額のやう 狭まいことを言ふ也猫の額にも足らぬ屋敷杯
と言ふのは之である。

六十猫の茶飲み 生意氣なことを言ふ者を諷した語である猫は茶を
飲まぬもの然るに人の真似して茶を飲むならば先づ生意氣な振舞と
して良からう。

六十一猫よりは優し 猫は鼠を捕るより外に先づ能はない其他の事
で如何に飼主が忙がしい目に逢つて居ても猫は知らぬ顔である其時
小供等が少しても手助けになれば猫よりは優してであると褒めるので

ある併し此褒方は餘り上々ではない矢張猫よりは優しなのである。
六十二猫を逐ふより魚をしまへ 魚を捕られまいとして猫の番をし
て居るよりは猫の捕り得ぬ處に魚を収めて置けとの事猫は捕るのが

役目それに捕られたからとて猫に忿るともニヤンにもならぬ。
六十三猫を殺すと七代たゝる それだから殺すな。

六十四猫は三年の恩を三日で忘れる 斯様なことは決して無いから
先づ可愛がつて欲しいと猫連一同の申込である。

六十五猫の鼻と女のお尻は常に冷たい 猫の鼻の冷たいことは既に
言ふたから抜きとして女のお尻の冷たいことに就て少々語らう元來

女のお尻と云ふものは皮膚が頗る堅く出来て居るので其爲に血管の
働きが頗る鈍い従つて血液の循環が宜しくないもので平常他の部分に
比して冷たいのである故に御婦人方はお尻は冷たいものとして終は

ないて成る可く暖かくなるやうに保温力の最も強いものを巻いて置
くべきである彼のフランネルの腰巻を爲し又は真綿入の尻當を爲す
が如きは頗る其道に適つて居ると言はねばならぬ。

六十六猫井 猫井とは御飯に鯉魚節を振掛け之に醬液を注いだもの。

第八章 猫の歸らぬ時の心得

第一節 猫の歸らぬ時の禁厭

一、猫の歸らぬ時の禁厭（其一）猫は家に親しむ動物で、吾輩の實驗によりても生きてさへ居れば必ず歸り、又一友人の猫の如きは一里半も距たつた處へ携へ行つたるに、六日目の後に歸つて來たと云ふことであるから、大抵は家に歸るものであるが、若し何れかに往つて歸らぬ時には、其居なくなつた日を思ひ出し、曆を取出して、其日の處へ墨を塗れば、歸つて來ると云ふ、即ち三月十五日に居なくなつたのならば、三月十五日の處に墨を塗るのである。

二、猫の歸らぬ時の禁厭（其二）第二の法は、猫の食器をふせて置けば、猫が歸つて來ると云ふことである。

第一節 猫の歸らぬ時の禁厭 第二節 猫を家に落つかす法
著者曰く以上二法共に實驗せざれば保證が出来ない。

第二節 猫を家に落つかす法

一轉宅の時に猫を落着かす法 (其一) 轉宅をすると往々猫が去り行くものであるが、猫を其家に連れて行くと共に水にて足を洗ふてやると落着くと云ふ話である、併し之も保證が出来ない。
二轉宅の時に猫を落着かす法 (其二) 實驗によれば猫を連れて行つて直に其座敷又は房に卸ろさず先づ押入の如き處に入れて置く、斯くする時は猫は其家の香ひを嗅ぐことであるが、後ち家道具一切片着いてから室へ出せば、其押入と同じ香ひがするので猫は安心して落着く、而して直に魚でも與へれば大丈夫である。

第九章 猫と俳句の宗匠

第一節 俳句の宗匠と猫

猫に關する隨筆は彼の狐狸犬及び鼠等と同じく随分澤山あるので彼の講談師が作れる譯もないものを初めとして著名なる文豪の述作になつたものも少なくない、傑作猫の妻、假名垣魯文の種々なる作物、其他獸太平記、猫の双子、鹽尻中の猫に關するもの、雲萍雜誌の夫れ、閑窓瑣談、緒方氏猫物語、薄雲猫、舊語等吾輩が讀むだ丈でも數十種に上るのであるが、之等の隨筆又は文學的のものに至ては何れ他日を期して猫に關する文學全集を編する積りであるから、此書に於ては二三引抄したものの外、其全文を紹介することを敢てせず、併しながら同じく文學上の作物であるのに、獨り俳句丈を茲に抄録したのは、俳句は文學的作物で

第一節 俳句の宗匠と猫

あるにも拘はらず、其觀察は猫の性質に直接關係して居るものが多いからである。猫を題に取りて他の事を言ひ、若くは猫を題として戯文を作れるものゝ如きは、文學上の價値が如何に高貴であるにしても、本書著述の性質上探ることは出来ない。然るに俳句は今も言ひし通りに一言數語の中にも猫の性質と接觸して居るものが多いのを認め得らるゝので、殊に此俳句文を本書に引抄したのである。

猫に關する俳句の多きことは實に驚くべく、一々之を擧げたならば優に一部の猫俳句集が出来る。而して其作者も亦高名なる人が多く、凡そ俳匠にして猫のことを詠むて居らぬものはない。唯だ其數甚だ多きものと或は一二首に留まつて居るとの別は免れないが何人も必ず之を題として所感を述べて居る。然れども此俳人等が題として取れるは猫に非ずして猫の戀と云ふ一種の感情なので従つて其吟詠の範圍は極

めて狹まい、唯だ一茶宗匠並びに其流れを汲める者の俳句には、比較的戀以外のもの多く直に猫の性質を一言にして述べ盡して居るのがある。

蚤噛むて寢せて行くなり猫の親

人中を猫も子故のぬすみかな

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる

之等の句を讀むと同時に、何人も猫の性質と子猫の無邪氣なことが理解される。人中を猫も子故の盗みかな、蚤噛むて寢せて行くなり猫の親、此二句によりて親としての猫は遺憾なく説明されると思ふ。其子猫を詠みて猫の子や秤にかゝりつゝじやれると云ふに至て數頭の小猫が躍如として現はれる、一茶及び其流れを汲める者の俳句には其戀を詠むにも餘りに罵詈を逞ふして居ない。

第九章 猫と俳句の宗匠

通ふにも四方山なり寺の猫
汚れ猫それさへ妻は持にけり

の如きはそれである、諧調の上にも温かき同情の籠つて居るのは一茶の俳句であると思ふ、従つて唯だ諧調のみを性命として居る俳句よりも讀むて氣持が良い彼の多代女が

にぐらしふなりけり猫の戀知りて
打とけた聲つい聞かず猫の戀

高名なる千代女が

ふみわけて雪に迷ふた猫の戀
聲立ぬ時がわかれぞ猫の戀

杯女流の作として讀みて心地よく、又猫の戀をも説明するに足るではないか彼の來山が

兩方に毘のありけり猫の戀

杯は何等の快感を起さない、唯だ實を穿てるを見るのみである、尤も吾輩若しくは讀者が快感を起さぬからとて拙作であるとは言へぬ、又吾輩は作の巧拙の如きは問ふの資格が無いのである、之を要するに茲に引抄したる俳句は其性質の如何に關せず、唯だ猫を題として詠みたるもの及び題は別のものでも句中に猫の字を有するものを、手當り次第に集めたもので、序列も正しからず、又其宗匠の人物の高下によりて前後階級もつけてはない、則ち彼等俳匠は猫を如何に見て居るかを見んとするものであるから、其必要もなく、又人物の高下などは吾輩の知らぬ處である、併しながら一茶宗匠丈は別に一節を置いたのは、其句數が他の者に比して多く、又猫を知るのに最も好都合な句が多いからである、女流の俳句丈別にしたのは、一に見易からしめんが爲めて他に何等

の理由はないのである。
 其角の全集中に古麻戀句合と云ふものがある、之は猫の戀情を知るに
 も又猫の普通性を知るにも上乘のものではない、併しながら猫を以て
 種々なる戀を詠みし處に趣味あると、且は纏まつて居るものであるか
 ら、其全句を掲げることにしたのである。
 猫に關する俳句を此書に編入したる理由は右の如く、又編次の形式も
 既に述べた如くである、加ふるに吾輩は俳句と云ふものゝ可否を知ら
 ない者であるから、或は高名なる人の句を落して居るも知れぬ、否、斯様
 なことは有勝なことと思ふが、之れとても重大なる欠陥ではないと思
 ふ、若し夫れ一茶、其角、芭蕉、蕪村、大江、九千代女、多代女、及び園女を初めと
 して、著名なる俳人が如何に猫を見たるか、如何に猫を詠みたるかを、例
 令僅かながらも知らしむるを得ば、吾輩の望みは足るのである、文學書

ならざる本書は是等數萬人の俳句を集めて、之が一覽表を作るの要を
 認めない、而かも察するに上記の人々は皆俳句界の巨人であるから、其
 一句一吟は直に俳句界全體の所見を知るに足るであらう、俳句を集め
 て本書に編するに就て一言此事を述べて置くのである。

第二節 古麻戀句合

初戀

切戸から尾骨見初めて玉かづら
 足跡を妻戀ふ猫や雪の中

秋 航

忍戀

山鳥の尾こそ火を消せ長局
 ひとりね

三 弄

第二節 古麻戀句合

獨りふすそがくしさを三年猫

おもひ

下くゝる水の思ひや梨の舌

うらみ

葛の葉のうらみの助や男猫

見かわす戀

あくがれて琴柱斃すや雲居猫

戀々

松山を神こす猫のうらみかな

待戀

夕やみやかもしと見せて仕掛猫

梅か枝や鼻あたゝかき塀の笠

辨外

楓子

周東

宜藤

虎琴

馬里

堤亭

恥戀

而ぶせもあつぼね猫の額白

老戀

玉藻とや名のらで出づる古老猫

己が背をみつはくむなりかじけ猫

幼戀

箒木の百目なき子にわかれかな

新参あかぬ別れの屎仕かな

寄枕戀

仰や糸目に立てる枕神

よれ枕猫の戀にもこひ衣

寄鏡戀

朝叟

紫紅

秋色

其角

其隼

秋航

うつしなや四つ乳に成りしませ鏡
舟猫やおのが口すふ水かゞみ

寄籠戀

玉だれの手影床しき坊主猫

寄薰戀

おもかげや咽もならさず瓦猫

寄占戀

爪とぐや思ひあまりて壘占

灰うらに問はるゝ猫や七不思議

經年戀

いつ君に鼻はじかれて猫の年

迷戀

專 仰
利 合

楓 子

十 流

適 三

殘 杏

銀 杏

ふり揚げる刀はあだなり主寮猫

寄繪戀

貌ゑどる猫の尻目や繪具皿

待暮戀

うき思ひ濃茶時分のむつけ猫

契來世戀

身の皮を同じ思ひか海老尾

白地戀

覗きよる湯殿の猫やさよころも

餘愛戀

戀やせを撫ども盡さし腹ののみ

女房達洗へる猫や華清宮

馬 里

川 支

野 徑

硯 水

酉 花

朝 叟

午 寂

第二節 古麻戀句合

神祇戀

青柳や尾に附らるゝ三輪の注連

寄橋戀

嚙ふせて階子を佐野のわかれかな

尋戀

若草にからるゝ妻や二ひきまで

絶戀

朝露や別れを如何薪一把

祈戀

うかりける人を初瀬のやとひ猫

憎戀

いのられてワキ師にくむや般若猫

甫盛

山峯

問津

沾州

波麥

新真

仇戀

爪の尾にあれたる猫はつなぎけり

寄寺戀

柏木の柳もそれかあかり猫

古寺や赤手拭は虎御前

述懷戀

寝もやらで浪人猫の日陰かな

墨染と思ひけてけり鳥猫

寄月戀

白玉が問ひ来る猫をさぼる月

寄日戀

思ひのみ日にむく腹は布袋猫

倚窓

其角

波麥

入松

紫紅

毎閑

序令

後朝戀

あつはいをかくる朝のふとんかな

百里

晝戀

晝はねて衛士とならぶや火傷猫

心水

夜戀

煮こよりや猫の白浪夜半に行く
春の夜をいつか歸りてよごれねこ

手寂 堤亭

思他戀

たが猫ぞ棚から落す鍋の數
飯食へば君が方へと訴訟猫

沾徳 其角

戀病

こよひもや風呂屋へ通ふ疝氣猫

大町

とかげ食ふ食傷つらしやつれ猫

昌川

被棄戀

西行の思ひすてゝや銀座猫

白獅

寄床戀

塗箱をふす猪になつて春の夢

口遊

寄垣戀

魚串を嗅いで忍ぶや笹ぐるめ

紫紅

寄關戀

包まれて髭は折るとも戀の關

朝叟

寄石戀

石曰やわれて中より猫の情

露拍

寄海戀

うき戀ひや度び重なれば簀卷猫

角 枝

不定戀

ありながら浮草猫や御縁づく

午 寂

疑戀

腰元の二人静はいつれ猫

午 寂

花の夢胡蝶に似たり辰之助

其 角

寄琴戀

花の夜や猫の管絃は琴の役

野 徑

寄鞠戀

蹴らるゝやえもん流しの猫の曲

里 東

寄窓戀

深窓の頬をねぶるや秘藏猫

闇 指

寄几帳戀

手几帳は三毛とさだめぬ戀路かな

適 三

寄屏風戀

搔き破ぶる屏風かたしや妻の影

揚 葉

寄帶戀

男猫とて七卷半や君が帯

甫 盛

遠別戀

鶉から身を鳥猫のおもひかな

川 支

寄池戀

うかれ來ていつ害に身投猫

其 雫

忘戀

またゝびやつはりながらの忘れ草

紫 子

貴き戀

ぬれ衣や綸子を被むる位猫

朝 叟

被輕賤戀

己が毛の蓬なるをや戀の賤

其 雫

觸物催戀

陽炎にそはて身も世の團子猫

堤 亭

隔開他戀

棧子には及ばぬ戀か座頭猫

朝 叟

近隣戀

京町の猫通ひけり揚屋町

其 角

寄塚戀

戀塚を猫にさせけんよきふとん

幾 石

亂戀

戀ひよるやとりなりもめて龍田猫

市 盛

哀戀

乞食猫見えをすてゝや物狂ひ

新 眞

頼戀

立猫や居猫の中へつかへ猫

東 潮

進戀

君や來し面はうつしの出合猫

春 船

寄風俗戀

立すがた今も祇園の娘猫

白 獅

忍切戀

忍ぶ夜を水鐵砲や光猫

潘 川

第二節 古麻戀句合

人傳戀

蒲公や明けた袋へよめり猫

波 麥

寄雲猫

姥がよぶ伏見常盤かやどる猫

紫 紅

寄雲戀

逢ぬ夜は高間の雲か頭痛猫

朝 叟

寄松戀

爪かきや松に見かわすまるかたけ

序 令

寄竹戀

埋められた己が泪やまだら竹

其 角

寄煙戀

胸にたく尻尾の灸や淺間山

午 寂

錦木のもえて虎毛のけぶりかな

乍 之

名立戀

首玉に我名や立ちしやみの聲

秋 航

大梁に名は立つ君が夕けさう

到 李

艶粧戀

くらへこし猿は前髪帽子猫

新 眞

久契戀

菜箸を喰へて猫の連理かな

午 寂

失寵戀

子を食ふは戀のむくらか因果猫

全 阿

不馴戀

馬下になくねはづかし田舎猫

千 琳

第九章 猫と俳句の宗匠

第二節 古麻戀句合

増戀

君が裾定家かつらや二歳猫

酉花

寄舞妓戀

戀種の猫の狂言あけにけり

堤亭

流行戀

乗かけにそゞろうけとや猫の妻

琴風

舟路戀

いつの間に通ひ來ぬらん唐の種

星帘

寄蚤戀

海士ならで君がふすへやかまどねこ

辨外

求媒戀

吉日をえらめる猫や櫻さめ

曉白

まれにあふ戀

かい巻に君をねさせて三苜に猫

周東

寄雨戀

春雨や瓦灯も細き留守居猫

堤亭

寄聲戀

焼物や泪にこもる藏の猫

里東

第三節 一茶と猫

しばられて肝かくなり猫の戀

一茶宗匠

關守が叱りかへすや猫の戀

全人

うかれ猫戀ひ氣狂ひと見ゆるなり

全人

通ふにも四方山なり寺の猫

全人

門の山猫の通路つきにけり
 汚れ猫それさへ妻は持にけり
 蚤噛むて寝せて行くなり猫の親
 草原へこすり落すや猫の蚤
 猫の子のちよいとさへる木の葉哉
 百敷の都は猫も布團哉
 小布團や猫にもたるゝ足のうら
 初雪を着て戻りけり秘藏猫
 猫つれて松へ同居やすゝはらひ
 煤竹へころく猫はざれにけり
 お仲間に猫も座とるや年わすれ
 かくれ家や猫が三匹餅の番

一茶宗匠
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

一袋猫もごまめの年用意
 灰猫のやうな柳もお花哉
 かくれ家や猫にもすへる二日灸
 猫の子や秤にかゝりつゝじやれる
 大猫の尻尾でなぶる小蝶哉
 あかつきや猫の戀するはつせ山
 おもひねかて猫はなちやる雨夜哉
 きりくす猫にとられて音もなし
 人中を猫も子故のぬすみ哉
 鬼灯を膝の小猫にとられけり
 地にあらは連木より鉢猫の戀ひ

一茶宗匠
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全
 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

第四節 女流の俳句と猫

手を上あげてうたれぬ猫の夫かな
 なつかしき人の名つけて猫のつま
 契りおく燕と遊はん庭の猫
 聲立てぬ時がわかれど猫の戀
 ふみわけて雪にまよふや猫の戀
 木天蓼は何の薬ぞ猫の戀
 飼猫も飢えた聲なり麥の秋
 にくらしうなりけり猫の戀知りて
 打とけた聲つい聞かず猫の戀
 戀せずば猫のこゝろの恐ろしや

智月尼
 某女
 園女
 千代尼
 全人
 花讚女
 全人
 多代女
 全人
 秋色女

かわゆさや雪を負手でかへる猫
 猫の妻いかなる君の奪ひ行く

堀江氏妻
 嵐雪の妻

第五節 諸名家の俳句と猫

盗まれし猫法輪に聲すなり
 春たつといふばかりにや三毛猫の
 猫の聲あかつきの雨となりけり
 猫の妻いかに久しきこたつより
 仇ねこに歌もおのりもなかりけり
 ねこの戀鼠も出でて御代の春
 戀猫に吹きかへされし蝴蝶哉
 戀くて猫のおなかや春の月

大江丸
 全人
 全人
 全人
 全人
 全人
 全人
 全人

短尺の數にも入るや猫の戀ひ
 猫の子にかゝれて居るや蝸牛
 戀猫のほだしも二十日ばかりなり
 戀猫や我古寺になきわかれ
 凧やまたゝきしげき猫の面
 うき戀に堪へてや猫の盜み食ひ
 足跡を妻戀ふ猫や雪の中
 爺も婆も猫も杓子も踊かな
 柸ふむ夜半も有べし猫の戀
 濡れたらば露と答へよ猫の戀
 おもひねの尾に蛇もしつ猫の戀
 鏡見ていざおもひ切れ猫の戀

酒 才 曉 全 八 己 其 燕 蓼 全 全 全
 堂 九 六 人 桑 百 角 村 太 人 人 人

白金の猫も捨てけり花の旅
 異見聞く耳すぼめけりねこの戀
 洗はるゝ夜半の憂目や猫の戀
 火傷して歸る夜もあり猫の戀
 麥飯にやつるゝ戀か猫のつま
 猫の戀やむとき聞のおぼる月
 張ぬさの猫に見えけりけさの秋

蓼 全 全 全 全 全 全
 太 人 人 人 人 蕉 人 人

nocturnal in its habits, prowling by night in search of the mammals and birds which form its food and thus doing immense damage in districts well stocked with game. The fierceness of its disposition, its strength, and its agility are well known, and although it does not seek to attack man, yet when disturbed in its lair, or when hemmed in, it will spring with tiger-like ferocity on its opponent, every hair on its body bristling with rage. "I never saw an animal fight so desperately," says Mr. Charles St. John (Wild Sports of the Highlands), or one which was so difficult to kill. "In country districts specimens of the domestic cat run wild are by no means uncommon, for having once tasted wild animal food, hares and rabbits are ever afterwards preferred to rats and mice, and when the house cat thus takes to hunting there are few animals more destructive to poultry and game. In some instances they have been known to hunt regularly in the woods and yet retain sufficient domesticity to carry home their prey before devouring it, and notwithstanding the Latin proverb.

"*Catus amat pisces, sed aquas intrare recusat,*" they have been known to overcome their aversion to water in order to gratify their taste for fish. The offspring of such semi-wild forms gradually assume a

CAT.

Encyclopaedia Britannica.

Cat a name applied in its widest sense to all feline animals, but generally restricted to a few of the smaller species which approximate more or less closely to the domestic form. Of undomesticated species the best known is the wild cat (*Felis tigris*), inhabiting the most inaccessible mountain fastnesses, and the deepest recesses of the forests of Central and Northern Europe and Asia. It attains a length of 3 feet including the tail, is of a yellowish grey colour above and whitish beneath, with a dark streak extending along the back to the origin of the tail, and with indistinct transverse bands on the sides. Its tail is bushy and of equal thickness throughout, annulated and tipped with black. The wild cat was formerly abundant throughout the wooded districts of Britain, but is now confined to Wales, the mountainous parts of the north-west of England, and the Highlands of Scotland, where, owing to the increased attention now paid to the preservation of game, it is being rapidly exterminated by trap and gun. It forms its nest in rocky crevices, or in the hollows of trees, and has been known to make use, for this purpose of the nests of the larger birds. It is

there are peculiarities in the dentition of this species, sufficient to invalidate its claim to be considered the ancestor in any single wild species has led many naturalists, including Temminck, Pallas, and Blyth, to the conclusion the *Felis domestica* is the product of many species commingled; and whatever weight may be attached to this view, there is sufficient evidence to show that domestic cat in different parts of the world have been greatly modified by frequent crossings with such wild species as occur in those parts. In the north of Scotland at the present day, the native species is believed occasionally to cross with the house cat, the product living in the houses. Such crosses would, no doubt, be much more frequent in ages when the wild cat was superabundant throughout, Europe and it is evidently owing to this, that, as Mr. Blyth states, the affinity of the ordinary British cat to *Felis catus*, as compared with any Indian tame cat, is manifest. The latter according to the same authority, has crossed with no fewer than four Indian wild species, and a tame specimen lately added to the British Museum, agreed in Dr. Gray's opinion, in almost every character with the Indian wild species *Felis chaus*. Similar instances of the crossing of native species with the domestic form have been noted

uniform colouring not unlike that of the wild cat,—a similarity which led to the supposition that the house cat was but a domesticated form of *Felis catus*. The greater size, however of the latter the uniform thickness of its tail—a peculiarity which never reappears in any of the domestic varieties, nor in those which have returned to the wild state—along with the fact of the great scarcity of house cats and high value set upon them throughout Europe during the Middle Ages, when the wild form was everywhere abundant may be held to prove that the domestic cat is specifically distinct from the wild form of our woods. Its origin, like that of many other domestic animals is sufficiently obscure to have become a matter of more or less probable conjecture. Reference is made to it in Sanskrit writings 2000 years old, and still more ancient records of it are to be found in the monumental figures and cat mummies of Egypt.

The latter, according to De Blainville belong to three distinct species, two of which are said to be still found, both wild and domesticated in parts of Egypt. The Gloved Cat of Nubia (*Felis maniculata*), which also occurs as a mummy, approaches most nearly in size, and in the tapering form of the tail, to the domestic cat, but Professor Owen has shown that

The disposition and habits of the domestic cat are familiar to all and need not be dwelt upon here. It has never evinced that devotion to man which characterizes the dog, though many individual cases of feline attachment might be quoted. It becomes, however, strongly attached to particular localities, and will find its way back from the most distant places although conveyed thither under cover. How it performs such feats has long puzzled naturalists, and no theory that has yet been advanced seems adequately to meet the case. It has been contended recently by Mr. A. R. Wallace that a cat which is being conveyed to a distance blindfold will have its sense of smell in full exercise, and will by this means take note of the successive odours it encounters on the way; that these will leave on its mind "a series of images as distinct as those we should receive by the sense of sight," and that "the recurrence of these odours in their proper inverse order—every house, ditch, field, and village having its own well-marked individuality would make it an easy matter for the animal in question to follow the identical route back, however many turnings and cross roads it may have followed" (*Nature* February 20. 1873). Among the ancient Egyptians the cat was sacred to Isis or moon temples were raised, and sacri-

in Algeria, South Africa, and Paragnay.

Although the cat has probably been domesticated quite as long as the dog, the number of distinct breeds inhabiting the same country, to which it has given rise, is strikingly small in comparison with those of the latter,—a fact owing, probably to the nocturnal habits of the cat and the consequent difficulty in preventing indiscriminate crossing.

That it is not owing to any inherent want of variability is proved by the very distinct breeds that have been developed in insular and other isolated situations, such as the tailless cats of the Isle of Man, which differ in size of head and length of limbs, as well as in absence of tail from the ordinary form, and the domestic cats of the Malayan Archipelago, in which the tail is short and truncated.

The best known and most distinct varieties are the Tabby; the Tortoise-shell or Spanish, with its pleasing mixture of black, white, and yellow; the Chartreuse, of a bluish-grey colour; and the Angora, with long silky hair of a dusky white, a favourite drawing-room pet, and the gentlest of all the varieties. Among less known breeds are the Chinese, with pendulous ears, the red-coloured breed of Tobolsk, and the twisted-tailed cats of Madagascar.

96
1160

發行所

圖書
出版
卸商

東京市京橋區本材木町三丁目二十番地

求光閣書店

電話本局二二二九番

振替口座一六〇九番

不許
複製

明治四十三年五月十五日發行
明治四十三年五月十日印刷

著者 石田孫太郎
發行者 服部喜太郎
印刷者 石川金太郎
印刷所 株式會社 秀英舍

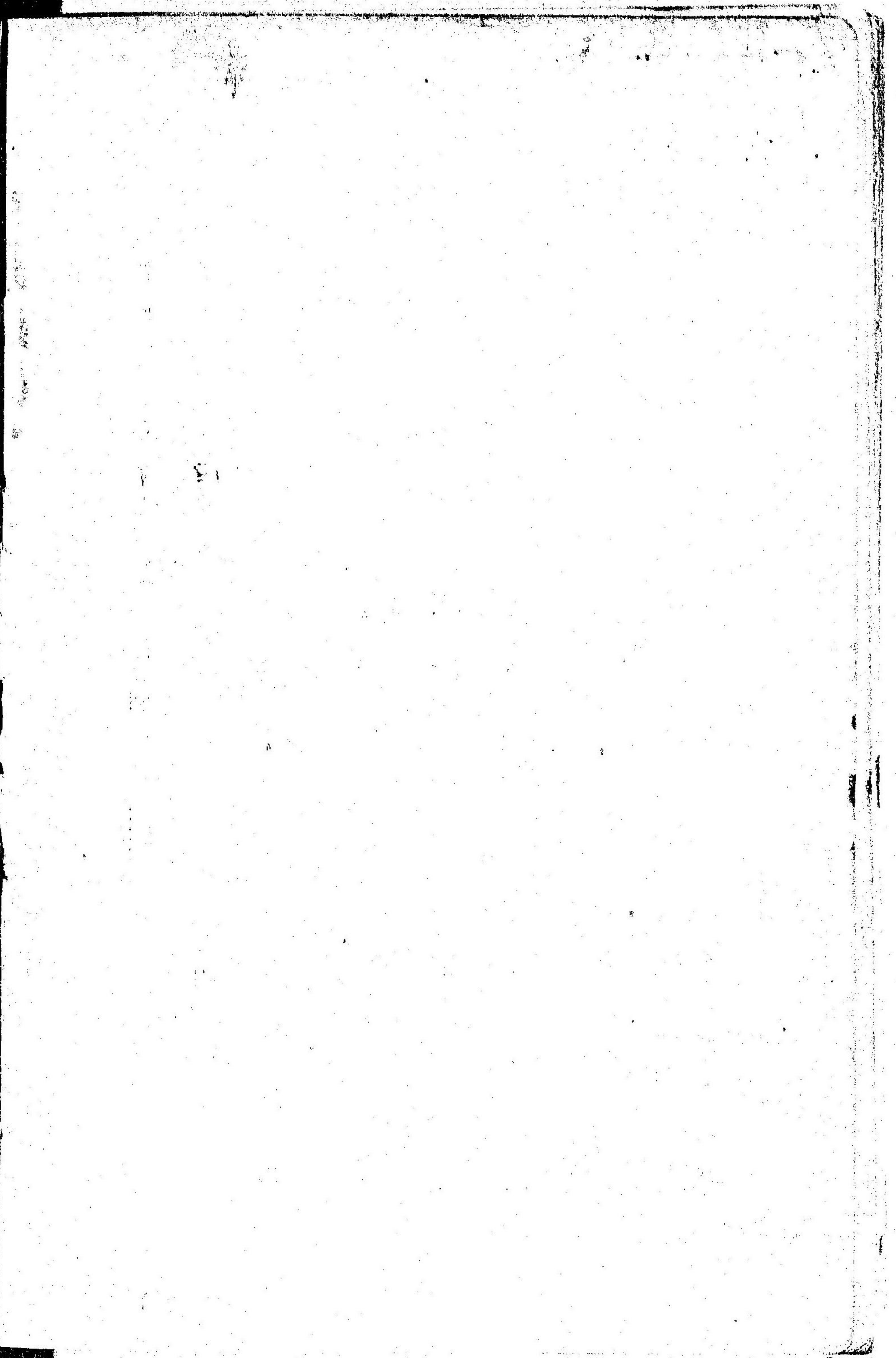
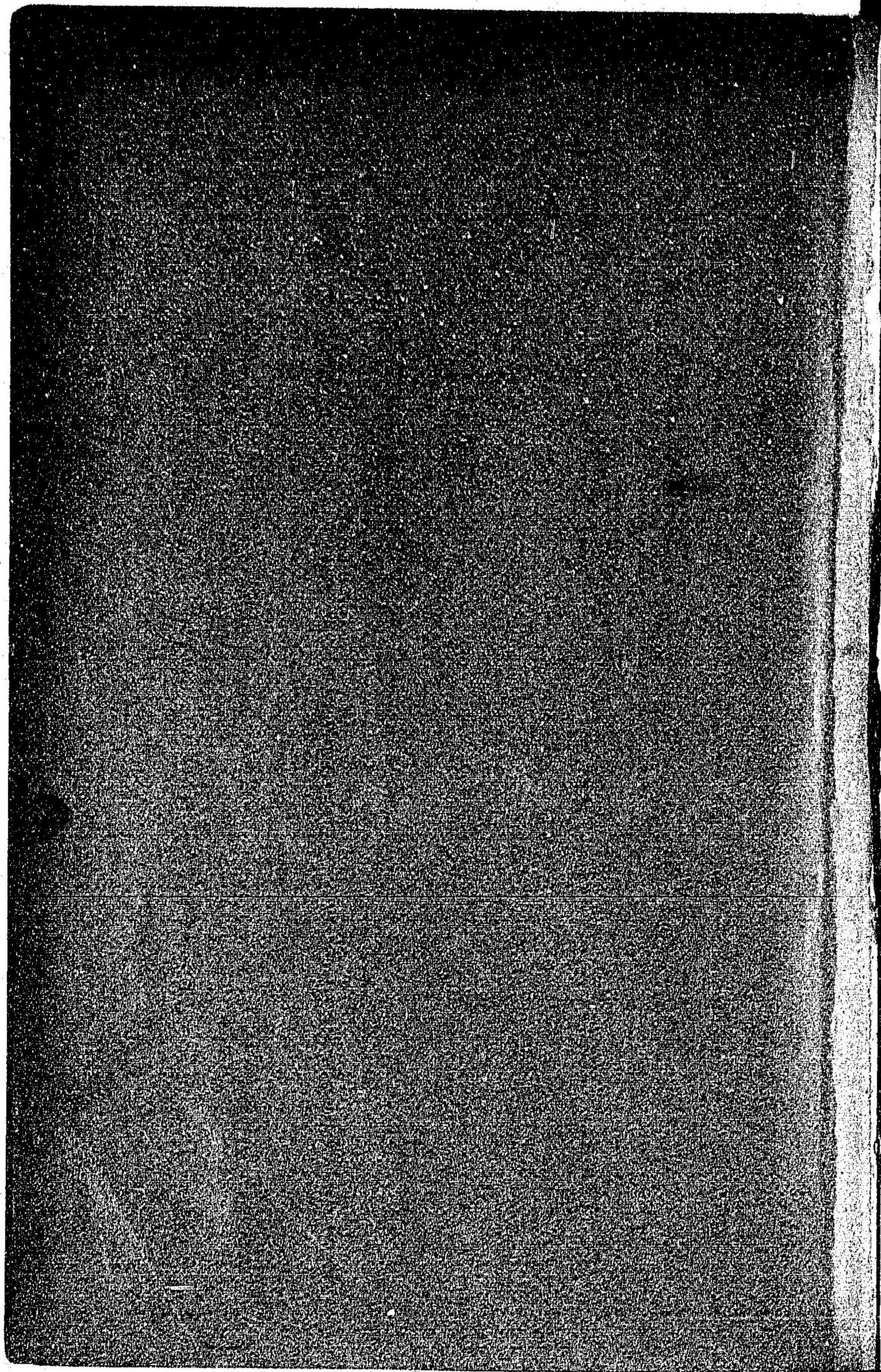
貓

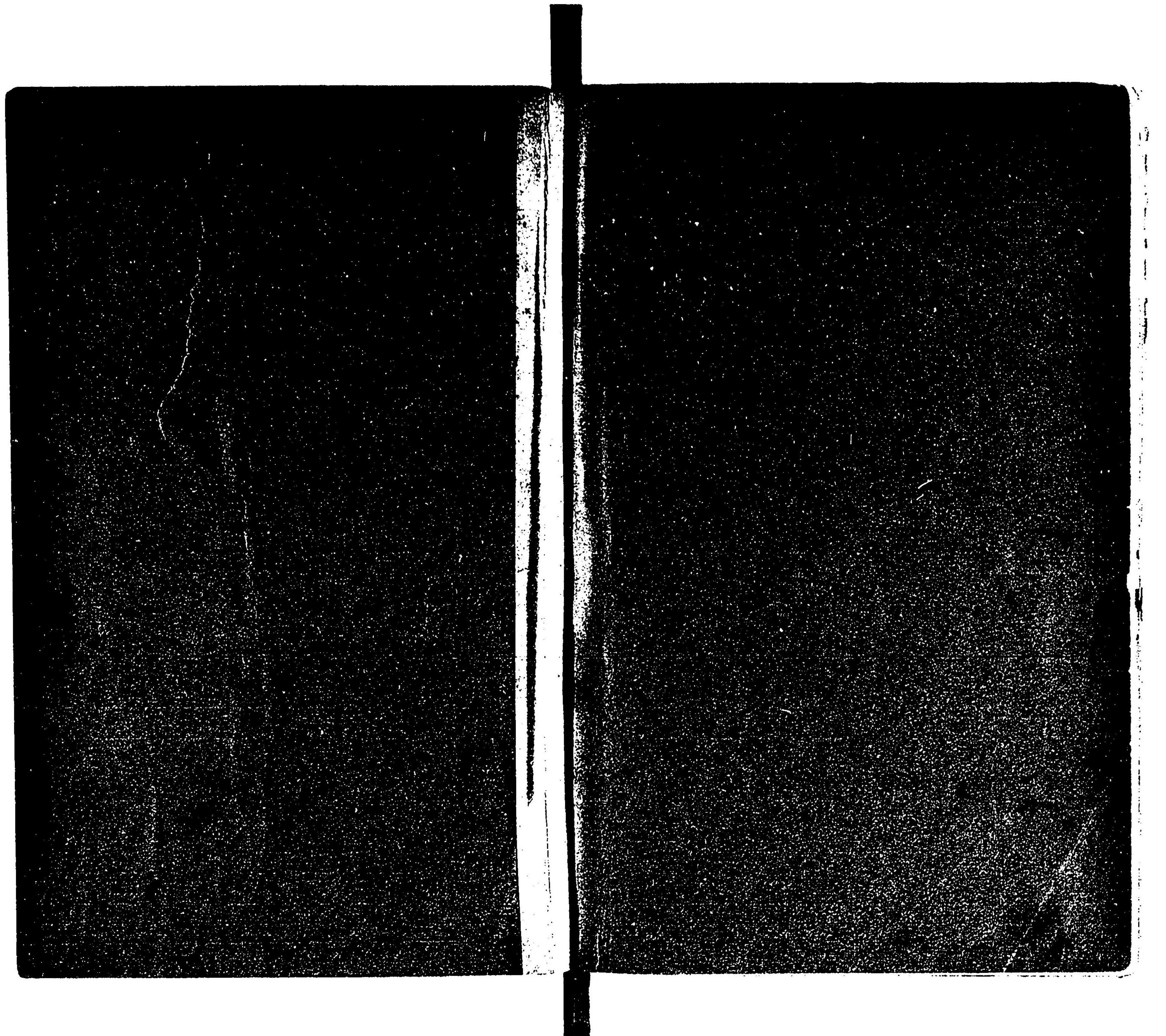
正價金四十錢

(268)

rices offered in its honour, and its body was embalmed at death. Nor is this feeling quite extinct among modern Egyptians, for in Cairns at the present time there is an endowment in operation for the lodging and feeding of homeless cats.

In the folk-lore of European nations the cat is regarded with suspicion as the favourite agent of witchcraft, and seems often to have shared in the cruelties inflicted on those who were supposed to practise the "black art." In Germany at the present day black cats are kept away from the cradles of children as omens of evil, while the appearance of a black cat on the bed of a sick person used to be taken as an announcement of approaching death.

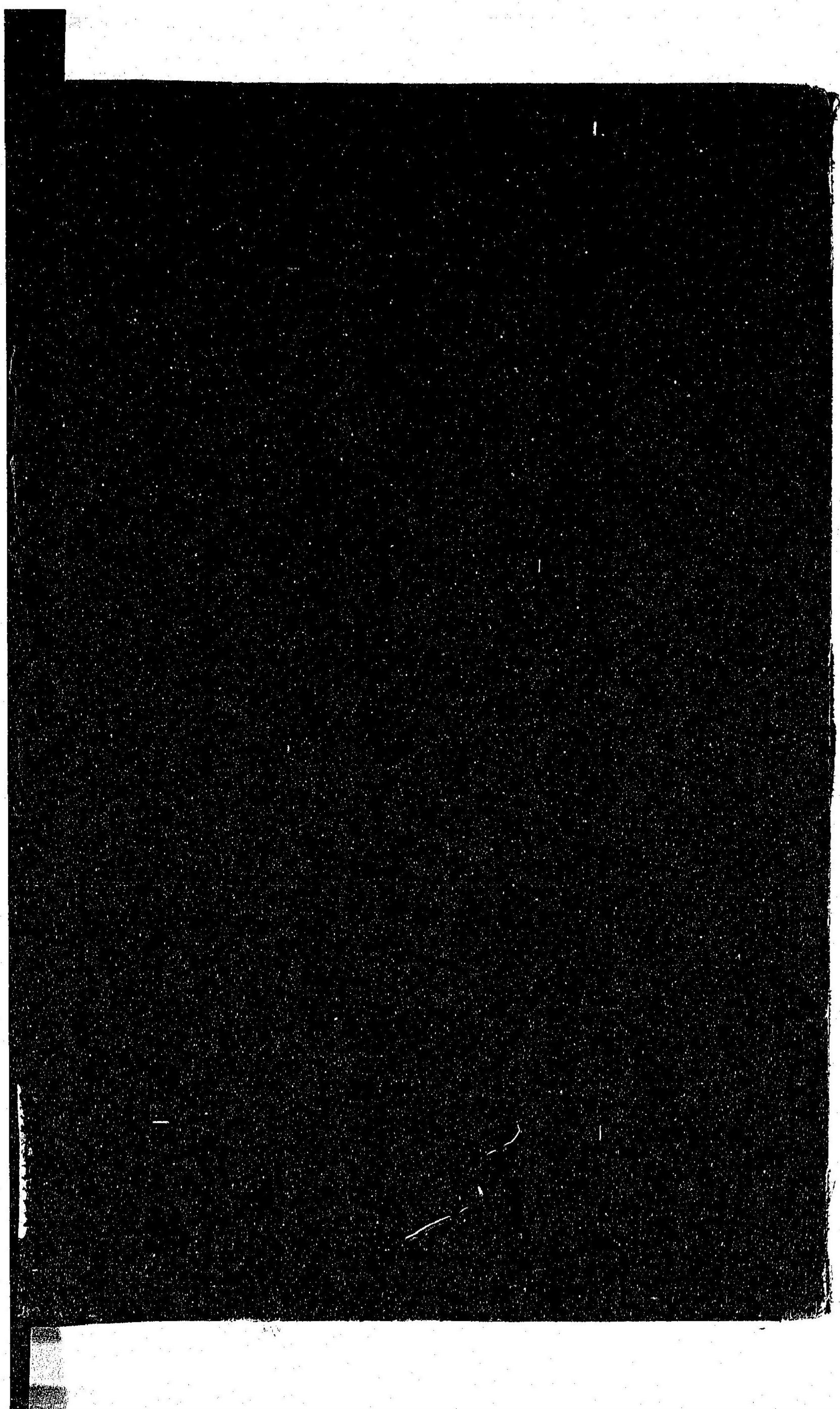






東京
求光閣發行

96
460





057641-000-5

96-460

猫

石田 孫太郎 / 著

M43

CAR-0242

